

## 梗概

本論文は、ネパールの地方都市と、その周辺地域における重度障害者の生存の難しさの実態を探ったものである。先天性または、幼少期に障害が発症した重度障害者は、主に親であるケアギバーの世代交代が行われるまで、ほとんど生存できないという事を、文献とフィールド調査より明らかにした。

本論文は、序章とそれに続く4章から構成されている。序章では、研究の背景と目的、先行研究と本論の位置、仮説と研究方法を示した。

第1章では、世界における障害者を取り巻く状況を概観した。世界各国で統一された障害の定義や調査方法による統計データが無いため、世界の障害者の状況を正確に把握するのが困難である事を示した。そして、各国政府が障害者の問題に足並みを揃えて対応するためにも、国連で障害の問題を統括する専門機関が必要である事を指摘した。

第2章では、日本における障害者の捉え方を説明し、社会保障や障害福祉に関わる制度を、具体例を通じて把握した。障害者やその家族は様々な制度を利用しながら生活している。そして、主に親であるケアギバーが亡き後は、当事者がそうした制度を活用して、最低限の生活を送る事が可能な状況を示した。また、障害者の現状を把握するための出生時平均余命等、詳細に分類された統計データが不十分である事を指摘し、その上で、障害者の出生時平均余命は障害者が無い人よりも短い事を示した。

第3章では、ネパールのヒンドゥー教やカースト等の社会文化的背景を理解した上で、ネパールにおける障害者を取り巻く状況や、ネパール国内の社会保障や障害福祉、NGO等による支援の状況について示した。制度の整備は進められているが、実施が不十分である事を文献引用と現地での観察から指摘した。

第4章では、グルミ郡レスンガ町を中心とした重度障害者の生存の難しさの現状を明らかにした。フィールド調査では、ケアギバーの世代交代後の重度障害者を見つける努力をしたが、見つける事ができなかったため、障害者家族、関係者、団体に、重度障害者の生存について話を聞いた。これらの結果から、調査対象の重度障害者は、ケアギバーの世代交代が行われる前に、そのほとんどが死亡している事を明らかにした。また、ネパールの障害者の年代別人口構成比から、20代で障害者が多く死亡していると推測し、その死亡推定年代は日本と比べると10年程早い事を明らかにした。本論におけるフィールド調査は、COVID-19の蔓延によって十分に行う事ができなかった。また、ネパールの障害者統計が不十分で、障害者数全容を把握する事ができなかった事に本論の限界がある。